南北戦争解釈の1考察

本田創造

1

さきに，私は『アメリカ南部奴隷社会の経済構造』(岩波書店，1964 年3月)と題する小著を公けにしたが，この書物については，すでに，いろいろな機会に，公私ともにかなり多くの意見や批判をきくことができた。そのうちのあるものは，いずれ活字になって学会誌にあらわれるであろうが，そこで展開されるとおもわれる問題点のいくつかは，いまからでもある程度予測することができる。そういった状況をいちおうふまえたうえで，ここでは，むしろ私じしんが，私じしんの問題意識にてらして，あの書物におけるもっとも基本な問題点を，現在の時点で再整理し，今後の研究のための足場にしておきたい。そういう意味で，本稿は，すでに公けにした書物の補遺ともいうべきものである。

基本的な問題点は，ゆきつくところ，19 世紀中葉のアメリカ合衆国の内戦，つまり，わが国で南北戦争とよばれているこの歴史的大事件の本質把握に帰着する。私が Ante-Bellum South の経済構造を分析することによって，まがりなりにも論証しようとつとめたものは，ひとことでいえば，あくまでも市民革命としての南北戦争の普遍性と特殊性，できることなら両者の統一的把握ということであった。プランテーション奴隷制度とは何か？ Ante-Bellum South とは何か？ といったような南部史に固有な問題も，論者がそれをどの程度まで意識的に南北戦争と結びつけているかは別にして，結果的にこの南北戦争をどう受けとめるかに大きく関係してくる。また，逆に，すでに共有財産としてあたえられているこんにちの研究史的段階において，論者が南北戦争をどう受けとめているかによって，そうした南部史に固有な問題についての評価や見解がわかれてくることが，実際問題としては多いのである。

戦後のわが国における南北戦争把握の現状をふりかえってみると，大勢としては，これを市民革命とみる見方が支配的だったようである。この点は，アメリカにおける学界状況とは，いちじるしく事情る異にしている。しかし，それでは南北戦争は何故に市民革命だったのか，と正面切って問いかえしてみると，これにこたえるにたる理論的・実証的研究は，ほとんどみあたらない。南北戦争にかんする 1930 年代のアメリカの進歩的歴史家の見解や，マルクスの古典的指摘が，菊池謙一氏の先駆的労作『アメリカ黒人奴隷制度と南北戦争』(未来社，1954 年)などをとおして，わが国の学界的風土のなかにごく自然に流れこみ，いつとはなしにそうなってしまったといったら，あまりにもいいすぎであろうか。

当然，わが国の学界内部に，とくに南部史研究の分野において，こうした風潮にたいするきびしい反省がおこってきた。それは，客観的には菊池謙一氏の業績を個々の具体的個別研究をとおして，どう克服するかというかたちをとってあらわれた。われわれは，そうした意欲的なモノグラフを，すでにいくつかもつことができた。そのことじたいは，いうまでもなく，わが国の南部史研究ひいては南北戦争研究の成果である。

だが，同時に，そこには，ひとつの特徴的な傾向がみえはじめた。すなわち，かつて南北戦争のなかに，ニュアンスの差こそあれ，市民革命性をみとめようとしていたひとびとのなかから，こんどは反対にこれを否定する帰結にみちびくような研究が生みだされつつあるという趨勢である。そして，それが，現象的には，こんにちのアメリカの歴史学界にみうけられるひとつの支配的傾向——保守的傾向と軌を一にしていることは，むしろ当然というべきであろう。

ここでは，さしあたり，昨年出版された山本幹雄氏の労作『南北戦争——その史的条件——』(法律文化社，をとりあげることによって，こうした問題を考えるためのいとぐちにしてみたい。というのは，私じしん，さきの自分の書物の序論のなかで，つぎのように書いているからである。すなわち，「私が本書の原稿をほぼ書きあげた頃，山本幹雄氏の『南北戦争——その史発条件——』が上梓された。この書物は，私が本書のあとがきのなかでふれた山本氏の前の書物『アメリカ黒人奴隷制』が南部を対象としたとは違い，地域的には北部を対象として，

南北戦争とくに戦争勃発にいたる史的条件を詳細に追求したものである。したがって，書物全体としては本書と直接的な関係はないが，南北戦争そのもののとらえかたという点では大いに関係してくる。その点についての山本氏の見解と私のそれとは本質的にかなり異なっているので，本書において言及したかったが，種々の事情のためそれが出来なかったのは大変残念である。またの機会に譲りたいとおもう。」

2

問題点を明確にするための手順として，まず，山本氏のこの書物の骨子を要約しておこう。ただ，いまもふれたように山本氏のこの労作が出版されたのは昨年の3月で，それからすでに1年以上の月日がたっており，その間にはいくつかの書評もなされているので，ここで要約というのは，書評のための一般的な内容紹介や書物全体の評価ではなくて，山本氏の南北戦争解釈の論理を，すでにみた南北戦争研究の脈絡のなかで，この書物にそくして，私が，私なりに整理することである。したがってこの書物の多くのすぐれた点にはふれずに，もっぱら私の立場からみた，批判点のみを摘出することになろうが，このことは前以ってご了承願いたい。

周知のように，山本氏は数年前に『黒人奴隷制』(創元歴史選書，1957 年)と題する書物を公けにされた。今度の書物は，山本氏の前著が黒人奴隷制度という南部の問題を直接的対象にとりあげることによって，南北戦争へのパースペクティヴとしたのとは異なり，新たに視点を北部に移して，北部の側から南北戦争勃発にいたる「史的条件」を追求したものである。書物の構成としては，全体が4つの章からなっている。その第1章「展望」では，南北戦争解釈の研究史的整理と，それをふるまえたうえでの山本氏じしんの問題設定がおこなわれ，第2章「社会構成的分析」では，主として 1850 年のセンサスを手がかりに，19 世紀半ばの北部における資本主義発展の成熟度，ならびにこれとの関連において農民と労働者の問題が，とくに前者に力点をおいて論じられている。第3章「政治史的条件」では，土地問題——といっても，いわゆる西部の公有地問題——が，当時のアメリカの国内政治の基本問題であったという認識にたって，それをめぐる争いが政党政治史もしくは政党抗争史としわれて展開され，そこに南北戦争が地域間抗争としてたたかたことの契機がもとめられている。最後の第4章は「世論」という題名をもった別個の章にはなっているが，内容的にはむしろ第3章のつづきであって——というのは，民衆の世論はもっぱら政党の動向をつたえた新聞論調に還元されて論じられているから——とくに時期をリンカンの大統領当選(1860 年 11 月 6 日)から南軍のフォート・サムター攻撃(1961 年 4 月 12 日)にいたる内戦勃発直前の危機の5ヵ月間にしぼって，前章と同様，主として政党政治史の観点から南部諸州の分離問題が地域間抗争の展開過程として論じられている。

以上の要約のしかたで，ある程度推測できることとおもうが，私の感じでは，この書物の中心テーマ——したがって，この書物における山本氏の主たる関心——は，第3章と第4章，すなわち南北戦争勃発にいたる政治過程そのものの分析にあるようにおもわれる。第2章の社会経済史的分析は，だから，そのための予備的作業(もしくは伏線的作業)としての役割をもつ。そういう意味で，この書物は，問題設定を別にすれば，全体が2つの部分に大別できる。すなわち予備的作業(もしくは伏線的作業)としての社会経済史的分析と，それをふまえた政治過程の分析である。そして，この政治過程の分析が，山本氏のいわれる「史的条件」である。こう書けば，この書物が，いかに野心的な仕事を企図したものであるかが，容易に推察できるであろう。というのは，「社会経済史は，けっきょくは政治史に集結されねばならない」という一部経済史家の「悲願」が，この書物のなかで具体化されているかにみえるからである。

それでは，こうした具体的分析をとおして，山本氏がそこで追求しようとしたものは，いったい何か？　それは，どのような論理をもって展開され，どのような帰結に到達したか？　つぎに，これらのことを，若干検討してみなければならぬ。

山本氏の問題設定によれば，「問題の核心」は，つぎの点にある。すなわち，「南北戦争」は一方で資本制と奴隷制との制度的な抗争を内容としながら，同時にそれが南北2つの地域のあいだの明確な地域闘争であったことに決定的な特長がある。」(傍点は筆者)これが，問題の出発点である。そして，出発点におけるこの認識は，「誰も否定できないであろう」既定事実として前提される。「そうだとすれば，南北戦争のとらえかたは，なぜ制度的抗争が同時に地域間闘争とならねばならなかったか」というかたちで提起される。たが，そのさい，大切なことは，山本氏によれば，この制度的抗争は「資本制と奴隷制の角逐という単純な制度的抗争ではなくて，北部と南部という地域性を内在させた闘いが本質であるため，平面的な同次元での抗争がそのまま南北戦争となるのではなく」「北部資本制社会と南部奴隷制社会という

独自の歴史的存在が，いわば立体的で異次元的な交錯を展開してはじめて南北戦争が到来すると考えるべきであろう」(傍点は筆者)という，きわめて難解な表現による基礎的視角が見透されることになる。

「立体的で異次元的な交錯」とは，いったい何か？この哲学的粉飾をおびた表現から，ただちに山本氏のいわんとする南北戦争の歴史像を具体的に頭に描きだすことのできるひとを探しだすことは，ちょっと困難であろう。少なくとも，私じしんは，はじめその意味が全くわからなかった。しかし，わからないながらも，私には，なにか，それが，この書物の心棒——ポジティヴな支えになっているのではないかという強い実感があった。そして，この実感が，こうでもあろうかと，私なりにある程度整理できたのは，ようやく第1章を読みおえたのちのことである。

図式化をおそれずに，結論だけを整理してみると，こうである。山本氏は，南北戦争解釈にかんするいくたの学説を研究史にてらして論評したあと，そのなかから2つの見解を，自己の論理的展開のための「2つの柱」としてとりあげる。すなわち，ビーアド，ハッカーらの「経済的解釈派」の見解と，ランダル，クレイヴンその他のいわゆる「修正派」の見解が，これである。しかし，この場合，とくに指摘しておかなければならないことは，第1に，前者にはマルクス——というよりは唯物史観の立場にたつ見解が経済的解釈派ということで一緒にもりこまれていること，第2に，こうしてとりあげられた2つの見解が，それこそ，平面的かつ同次元的に対置されていることである。

そうしたうえで，山本氏は，前者すなわち歴史的法則や歴史的必然を強調する「経済解釈派」からは，南北戦争の市民革命性が大きくうきぼりにされるが，その反面「制度が同時に地域的本質をもって成立していた」地域性——アメリカ的特殊性は捨象され，後者すなわちこの戦争の不可避性を否定して，これを「無用の戦争」とみる「修正派」からは，前者で無視ないしは付帯的条件とみなされた地域性は十分にいかされ「戦争勃発にいたる政治的経緯のダイナミズム」がいきいきと描かれはするが，そこに存在した歴史的法則がないがしろにされているのだ，という。そこで，山本氏は，これら2つの立場を止揚することによって，それぞれのもつ弱さを克服し，より高次な歴史理論を展開しようというのである。これが，私のつかみえた，さきの難解な表現の具体的内容である。

こうした見透し——方法論的立場にたって，まず，19世紀中葉の北部資本主義の成熟度が，すぐれて量的な観点から測られる。そこでの結論は，当時の北部資本主義の成熟度は「いわれるほど高いものではなく，」そのもとにおける北部社会は「移行期のプチ・ブルジョア社会」だったということにある。したがって，当該社会の根幹は，なによりも独立生産者的な農民であり，労働者もそのような移行期的特質を反映した性格をもつ。ここから，西部の公有地問題が，南部奴隷制との関連において，絶対的な比重をもって，当時の国内政治の基本問題にならざるをえなくなるのだという。(何故，西部の公有地問題だけが，それほど際立って重視されるのか，この点についての理論的なつながりは，山本氏の論理にたってみても，私には，よくわからない。)

しかし，ここでも指摘しておかなければならないことは，第1に，いまものべたように，資本主義の成立状況が，「資本主義の成熟度」ということで，「社会構成的分析」といっても，もっぱら量的にのみ把握されて，生産関係などは全く問題にされていないことである。しかも，そのさい，その「成熟度」は，資本投下額，労働者数，生産高などにかんして1経営当りの規模が算術平均的にもとめられ，それがこんにちからみればきわめて小であるというような，極端なまでの単純化がおこなわれている。第2に，このような量的把握において，1850年のセンサスだけが用いられ，1860年のそれは使用されていないから，50年代の発展というようなことは全く問題にされず，1850年という時点で，きわめてスタティックにとりあつかわれて，発展的視角が無視されていることである。第3に，以上の2点とも関連しているが，農業における資本主義の発展ということも問題にされていない。

私の大別によれば，ここまでが，いわばこの書物の準備段階である。地域間抗争の媒介項として，こうして土地問題——といっても西部の公有地問題を登場させてきた以上，あとはこれを挺子にした政治闘争ということひとつにしぼられる。約370頁の書物の半分がこれにあてられ，戦争勃発の契機は，もっぱら，この土地問題にからむ南北間の抗争のなかにもとめられる。叙述は細部におよび，当時の1次資料を丹念にあさって，諸事件を他の諸関係からきりはなして個別的にみるかぎり，きわめて貴重な多くの材料を，われわれに提供してくれている。そうした操作をつうじて，山本氏は，たしかに「経済的解釈派」にはみられなかった南北抗争の地域性——アメリカ的特殊性というものを，いきいきと独自の論理で描きあげていく。だが，ここでの問題は，第1に，こうし

た政治闘争はつねに政党間の軋轢に還元されてしまい，地域間抗争もその次元でのみ問題にされて，したがって民衆のうごきなどもそれじたいとしては完全に無視されていること，第2に，その地域抗争の契機は，もっぱら西部の土地問題であって，国内市場の問題も，関税の問題も，奴隷制度の問題さえもが，土地問題という垂れ幕のうしろにかくれてしまって姿をみせないでいること，である。

こうして，この書物を読みおわったあとで強烈に残る印象は，北部資本主義の未成熟→農民→土地問題→それをめぐる政党間の軋轢→地域間抗争という，あまりにも一元化(もしくは単純化)された1本の糸である。だから，たとえば共和党というような政党さえも，もっぱら「土地政党」としてのみ歴史的役割をもつものであるかのように把握され，産業資本という言葉さえ，これとの関連においてでてこないのである。

ところで，これまでみてきたような，きわめて一元化(もしくは単純化)された論理による具体的展開と，さいしょに山本氏が提示された問題設定とは，どのように結びついてくるのであろうか？　そのことは，けっきょくのところ，山本氏が南北戦争をどう受けとめようとしているかという1点に帰着する。このことにかんして，山本氏じしんは，それとしては何もいっていないから，私なりに判断するより仕方ないが，そもそも「2つの柱」の止揚をめざして出発したはずのこの書物は，最後に帰結した到達点においては，以上みてきたような論理的展開をへて，さいしょの意図に反して一方の柱である「修正派」の立場，すなわち法則性の否定による地域性——アメリカ的特殊性を極度に強調にする結果になっているように，私にはおもわれる。じかも，その地域性は，ほとんどすべて政党間の軋轢という次元に還元されて，「史的条件」といいながらも政治過程とよぶには余りにも狭い局面に制限されてしまっている。

こうして，さいしょに，山本氏が南北戦争は「一方で資本制と奴隷制との制度的抗争であるが，同時に地域間闘争である」(傍点は筆者)とのべて「誰も否定することができない」とされたそもそもの前提の具体的内容は，いまや，つぎのようなかたちで提示されるここになったのである。すなわち，南北戦争は，少なくともその勃発の経緯にてらしてみれば，西部の土地問題をめぐる南北2大政党の抗争に集約される地域間闘争であるということである。そこでは資本制と奴隷制との制度的抗争という視角は，完全に脱落してしまっている。このことは，私にとっては，ひとつの驚きであった。というのは，さきにふれた山本氏の前著『アメリカ黒人奴隷制』においては，南北戦争を資本制と奴隷制との抗争とみることによって，それを市民革命としてとらえようとする山本氏の志向がかなり感じとられたものであったが，こんどの書物ではそれが全く影をひそめてしまたっからである。(これらの点についての私じしんの見解は，拙著の序論を参照されたい。)

3

南北戦争の本質を，積極的にどのように規定するのかということまではわかりかねるが，山本氏とは異なった歴史認識のもとに，南北戦争から市民革性を否定することになるもうひとつの見解を，去る5五月中旬にひらかれたアメリカ経済史研究会の全国大会の席上，南部の奴隷制度をめぐる討議にかんして，やはり南部史研究者のひとりからきくことができた。(ここではあえて，名前をあげないでおく。というのは，この大会はもちろん公式のものであり，したがってそこでの見解の発表は公式発言として名前をあげてさしつかえないのであるが，即席の発言であったことと，いずれはその発言内容がもっと正確に具体化された個別研究として学会誌に発表されるとおもわれるからである。ただ，ひとことつけくわえておきたいのは，かれも，また，かつては南北戦争のなかに市民革命性をみとめようとして，そうした観点から，いくつかの好論文を発表してきた南部史研究者のひとりだったということである。)

その見解によれば，当時の資本主義発展の世界史的段階においては，アメリカ北部の資本主義は 19 世紀中葉にはすでに南部という地域内にかなり浸透しており，とくに境界諸州とよばれる Upper South は経済的にはすでに資本主義化されていて，奴隷制度が強固に存続しつづけていたのは Lower South ——それも，そのほんの数州にすぎず，したがってアメリカ合衆国を全体的にみれば，資本主義は，この数州のごくかぎられた地域をのぞき，アメリカ全土にひろくゆきわたっていた。南北戦争は，そうした数州になお根強く存在していた奴隷制度を強力的に消滅させはしたが，しかし，その歴史的役割は，すでに除々に資本主義化されてしまっていた南部のこうした経済状態を，政治的に事後確認したにすぎなかったのだ，というのである。

ここには，同時に，私の書物にたいする，いくつかの批判点がふくまれている。根本的な問題としては，南部のプランテーション奴隷制度を前近代的なものとみる私の見解にたいする疑問が投げかけられているのであるが，

南北戦争解釈との直接的な関連においては，アメリカにおける市民革命のとらえかた，ならびに Ante-Bellum South のとらえかたについての私の見解にたいする批判である。この直接的な批判点のうち，第1の問題については，この国は 18 世紀後半にすでに独立革命という市民革命をもったのであるから，1世紀ちかくもたってまた市民革命をやるというのはおかしいということであり，第2の問題については，Ant-Bellum South を奴隷制社会と規定することにたいする批判である。これら2つの批判ないし疑問にたいしては，批判者がこれらの問題をどのように把握しているのか，さらにつっこんで積極的な意見をきくことができなかったげんざいの段階では，私としては，私が自分の書物のなかで展開したこと以上に議論を先にすすめることはできないが，いずれにしても，ここにもこういうかたちで南北戦争から市民革命性を否定する見解があらわれているのである。

19 世紀中葉のアメリカ合衆国における資本主義の成立状況にかんして，山本氏が，北部の資本主義の未成熟をいい，いまここにのべたもうひとつの見解が，ほとんど南部という地域まで包摂した発展をいう。しかも，そのどちらもが，南北戦争から市民革命性を否定する帰結にみちびくことになっているのである。私じしんは，これまで直接に北部の資本主義発展の問題をとりあげたことはなかったが，私が従来やってきた南部史の諸問題にかんする研究をとおしてみて，また，わが国におけるアメリカ資本主義の研究者がすでに多数発表している多くの業績——その問題意識や問題設定はきわめて多種多様であるが——からみて，当時の北部の資本主義は，少なくとも南部の奴隷制度を桎梏と感じ，そのもとにある南部という地域を国内市場として開放するとともに，なによりも西部をしっかりとその支配下におく必要にせまられていたほどの発展段階にあった，というふうに考えてきたし，いまも，その程度に考えている。しかし，わが国における南部史研究者として，これまでもっとも活発に先進的な仕事をしてきたこれらのひとびとから，げんに，19 世紀中葉のアメリカ資本主義の成立状況(私は，山本氏が使用した「成熟度」という語を，あえて用いない)にかんして，すでにみてきたような提言がなされている以上，私としても，自分なりにそれをじっさいに明らかにするための理論的・実証的研究を具体的にすることの必要を痛感しないではいられない。何故なら，私じしん拙著のなかで示唆しているように，南北戦争の全面的な解明のためには，南部だけをとりあげたのでは楯の半面しかみたことにはならず，北部はいうにおよばず，西部をもふくめて，これらの各セクションが，当時の全アメリカ的な史的構成のもとで，対立と協調の複雑なからみあいのなかでどう位置づけされるか，それぞれの実態にそくしてそれを統一的・綜合的に把握する必要があるからである。

だが，そうはいってもこうした作業をすべて1人の研究者に要求するのは事実問題として無理——というより，現状ではむしろ間違いであろう。問題に接近する確かなヴィジョンをもつことと，そうしたヴィジョンのもとに，時間と能力の限られた研究者個人がじっさいにやらなければならない仕事とはいちおう別問題だからである。わが国における南北戦争の現段階をふまえてみれば，南部をやっているものには，まだ，それなりの，南部史プロパーの問題として，南北戦争の解明のためにやらなければならない仕事が山ほど残されているようにおもう。そういう意味で，今度の山本氏の書物についていえば，氏の研究意欲の積極性は高く評価しながらも，やや安易に北部の問題に間口をひろげすぎたうらみを感じる。

しかし，このことは，従来，北部ないしは西部の問題をあつかってきた多くのすぐれた研究者に，少なくともあらわれたかたちとしては，南北戦争の解明という問題意識が稀薄で，じっさいにそうした視角からなされた当時のアメリカ資本主義の実証分析が乏しいことが，大きな原因になっているようにおもわれる。これらの研究者の今後に期待するとともに，南北戦争にかぎらず，歴史研究における各研究者の個別性をみとめたうえで，研究者相互の全体的協力による綜合研究がのぞまれる。ばらばらに切りはなされた研究者個人の安易な綜合化は，問題解明のための前進にはならない。　(1964・7・15)